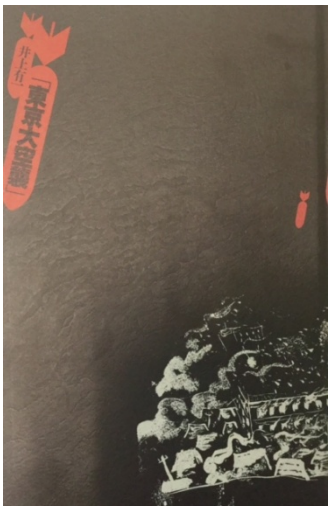
井上有一と東京大空襲

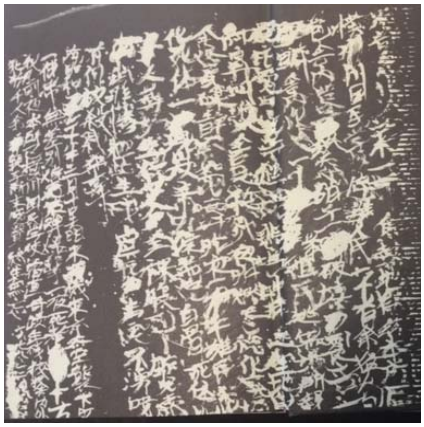
井上有一『東京大空襲』は 1995 年 2 月に岩波書店から出版された。この本について知ったのは、佐々木建先生のブログからだ。先生には大阪市立大の大学院の頃などに、たいへんお世話になった。時をあらためてレポートに書きたい。



表題は本書に収められている海上雅臣による「解説」だ。あの東京大空襲の日「3・10」から 1 週間後、最初のところだけでも紹介したい。

東京大空襲で江東地区が壊滅した時、国民学校の若い一教師がその夜の惨劇を中心に、前後一年間身近に起こった出来事を絵日記風にまとめていた。『草稿敗戦記』は習字用の半紙を 38 枚二つに折って綴じた簡素なノオトだ。水墨で書かれたこのノオトはとまどう群衆の姿を群衆の一人としての目で書いている。

筆者井上有一はこの下町で育った江戸ッ子だった。だから爆撃で郷土一帯が焼けてしまった時、敗戦を意識した。彼自身その時焼跡にころがされた死体の一つであった。奇蹟的に蘇生した後、再び児童をつれてみちのくに再疎開し勤労奉仕の鍬を振りながらも「何が何でも勝ちぬかねばならぬ」と書いている。だが、戦局の状況についてはもはやふれていない。原爆投下のニュースにもふれない。ラジオの前に集まって終戦を告げる天皇の声を聞いて泣く人びとの姿を、挿図のように軽く描いているだけだ。



東京大空襲 50 周年、終戦 50 周年を迎える 1995 年に、このようなノオトが出るとは夢のようだ。表題の上に「夢幻録」と記している。この世は夢か幻かという無常感から記したものだろう。

だが今の世へのこのノオトの出現には、もはや幻の向うの出来事とされ忘れられているような、このきびしい現実を、決して忘れないでくれ、夢にしないでもらいたい、という戒めの声がこめられているように思える。50 年前の東京のありさまをまざまざと見直させる。

(2016 年 3 月 17 日)